

# フランス文学移入史序説

富田 仁

——明治二十年代のフランス文学——

明治十一年六月、川島忠之助はジュール・ヴェルヌの小説『八十日間世界一周』を『新説八十日間世界一周』の訳題で初めてフランス語原典から翻訳し、刊行したが、それ以前にはフランス文学の翻訳はほとんどなく、わずかにルソーなど一部の文学者、思想家が紹介されていたにすぎなかった。ヴェルヌものの翻訳が科学万能思想の尊重の風潮を背景に行なわれるというように、明治十年代にはかなり多数の作品が伝えられた。ある種の作品は自由民権運動を反映して政治的色彩をおびていたが、概して云えば恣意的な翻訳であった。<sup>①</sup>これはおそらく、なにがすぐれて、なにが代表作であるかを知らずに翻訳していたためでもあったのだろう。当時の訳者が持ちえたフランス文学の知識を明治二十年代について調べてみようというのが小論の意図である。<sup>②</sup>

1

井上哲次郎は「仏国哲学の概況」（『哲学会雑誌』二十号、明治二十一年九月五日）において、イポリット・テーヌが『千九百年代の仏国哲学』を著わし、経験哲学を標榜し、『知識篇』では初めは経験心理学を説き、最後には形而上学に論及し、カントとミルとの知識論を排斥して、その中間に一種の地位を占めたことを伝え、さ

らには「審美哲学」で「一切の美術は物の特質を写し出す」ことを論じている点を指摘し、テーヌが経験学派であり、コントに近いけれど、いわゆるコント学派とはみなしにくいと論じている。ついで、エルネスト・ルナンをとりあげ、『耶蘇教紀原史』、『哲学問答録』に言及し、ルナンとの一問一答形式で、フランスの哲学の現況を述べている。

ルナンによると、この時期のフランスは、哲学衰退の時代であり、自分は唯物論者でも唯心論者でもないし、テーヌは現今第一の哲学者で、その学説は正しく、自分の哲学上の見解は『哲学問答録』に詳しいと云い、キリストは歴史上注目すべき人物であるが、哲学者が信じなくてはならない存在ではない、自分はキリスト教をいささかも信じないが、信ずるに足るものでもないと言く。

結局、フランスの哲学は、ヴィクトル・クザンの唯心論系統のフランス派、カントの先天論に拠るドイツ派、ミル、ベイン、主にスペンサーの経験哲学に依拠するイギリス派の三つの派に分れ、クザン一派が衰え、スペンサーの経験学派が抬頭している。これは哲学の領域に限られる現象ではなく、文学でもユゴー、デューマ以後古文学派」を排し、ゾラの猥褻なる「自然学派」が出現してきている。井上哲次郎のこの論文は当時としてはかなり充実した長論文

で、哲学界の現況を伝えたものであるが、文学界の動向にも大きく関連する部分をもっている点で注目される。

十九世紀フランス文学がロマン主義を経て、写実主義、自然主義へと発展していく時期であり、その大きな潮流は思想哲学上の流れと決して無縁ではありえなかった。とくに、テーヌヤルナンの場合、文学と思想・哲学の両域に大きくまたがっている人物であったので、そうした人物の紹介はすこぶる有意義であったと考えられる。

もちろん、この時期には前述のような哲学上の著作の紹介ばかりが行なわれたのではなく、フランス文学の紹介もさまざまな形で試みられていたのである。たとえば、宮本平九郎は『志がらみ草紙』十号（明治二十三年七月）に「仏国文学界の七詩星」を掲載し、ロンサル一派のいわゆるブレイヤードの詩人たちをとりあげて論じている。各詩人の略伝のあと、ブレイヤードの詩人たちの功績に触れ、「希臘拉丁の古語を藉来りて之を鎔鑄混化し以て仏蘭西語を高尚ならしむること」「古人の慣用せる種々の詩体を誘入し以て詩を高尚ならしむること」の二つの点を指摘している。このように古典文学の紹介が試みられたのは、長い伝統をもつフランス文学の理解のためには大切であるが、これはひとえに紹介者の見識を示すものであろう。

偶然かもしれない。ほぼ同じ時期、すなわち、二十三年七月の『日本之文華』十四号に「十七世紀に於ける仏国文学者」と題して猿の家という匿名人物がフランスにも文学があるのかどうかという声を聞くけれど、そんなふうな質問を受けるほどわが国ではフランス語、ましてやフランス文学を学ぶ者は少ないので、あえて自分が

その紹介の労をとるのだと、ルイ十四世の時代、十七世紀のフランス文学の大家たちを論述している。すなわち、バルザック、コルネイユ、ラ・ロシュフルコー、ラ・フォンテーヌ、モリエール、ヴォルテール、セヴィニエ夫人、ボッシュエ、ボワロー、ラシーヌ、ラブリュイエル、フェヌロンの十二名の評伝である。イギリスにシェイクスピア、ドライデン、ドイツにシルレル、ゲーテがいるように、フランスにはモリエール、フェヌロン、さらにはラシーヌ、コルネイユがいると云い、「諸大家は万能にあらず、散文をよくすれども、詩に巧ならざるあり、詩は巧なれども、散文に拙なるあり、故に各々其長所を取って以て、短所を補足せば、斯学の進歩亦大に見るべきものあらん」と、紹介者の意見を披瀝している。

もっとも、古典に対するこのような興味よりも同時代の文学への関心の方がはるかに強くみられたことも否めないように、たとえば『女学雑誌』二九五号（二十四年十二月）の「仏蘭西小説」の冒頭、「誰か仏蘭西の小説はゾラの小説なりと云ふ」という一節にはそうした関心の一端が示されていないだろうか。当時の人びとには、フランスの文学は、ゾラやユゴーなど世代の近い作家・詩人たちのそれだけでなくはならなかったであろう。彼らの関心は「仏蘭西人民の真生涯を写すもの」としてのフランス文学であったにちがいない。それであればこそ、「小説の實際派を論ず」（『女学雑誌』三〇八号、二十五年三月）という翻訳が掲げられたのであろう。ゾラの観察と実験を科学的方法を用いて文学的に構成していく小説論、すなわち実験小説論を適用する人々を實際派と呼ぶと説明し、ゾラとモーパッサンの二人についてこれを論述しているのである。

「ゾーラは現実変象の法を得たりしものにあらず ただその変象

を想像してここに結論を求めたるのみ。」

「モーパッサントはゾーラの同臭なり自然派の一味なり唯その臭やゾーラのごとく酷し<sup>はなはだ</sup>からざるのみ……。(中略)蓋し渠はゾーラに似たる偏着の自然派にあらず渠は現今の『ローマンス』をもて『自然』の真を欠く可からざる心の歴史とはなせりけり。」

と、フランスの写実主義の特質が説かれていたのである。

一方、「仏蘭西文学の最大特質」(『国民之友』一七四号、二十五年十月)では、

「一言以て之を蔽へば、其の社会的なるにあり……。 (中略) 国家と個人、父と子、夫と妻、義務と権利の關係程大なる問題を知らざるなり。」

と論じられている。フランス文学の特質を社会性と十九世紀後半の写実主義文学における真実の尊重という傾向とにおいて捉えている点に注意したい。さらに「仏国文学の新潮」(『国民之友』二一六号、二十七年二月)でも、ブルジェの言として文学は生活の反映であり、今日の小説家は道德的生活を写すことを目的とし、いまや写実主義から理想主義へと移行をみせ、道德復活の時期に入り、生理的実験主義よりも心理的実験主義に立脚するこの道德上の新潮はロシア文学とイギリス文学の影響と若者の爱国精神の高揚との二つの原因によるものであると説明している。このような動向はすでに雲井春香の「仏国思想界の変遷」(『日本評論』五八号、二十六年十二月)においても伝えられたことであるが、一八三〇年代の小説は情を主眼としており、四〇年代の小説は智にまみれており、七十年代では「拜金文学」の時代であって、ゾラ、モーパッサンにそれがきわめて顕著に認められるのである。さらに、ガブリエル・

モノオの評言を伝えて「今や仏蘭西は高尚なるもの、大いなるものを求むること切なり、美術も、文学も此の傾向を顕はせり」と、フランス文学に理想主義的傾向が抬頭してきていることを指摘している。

写実主義が人生の真を描くことに汲々としていたために、拜金思想的文学を生み出しかねなかつた点を反省して、もつと靈性的なものを求め、理想主義的傾向を取り戻そうとしたのであるが、このような動向が伝えられるとき、ゾラ、モーパッサンに先行する文学として、前世紀すなわち十八世紀の文学を十分に意識していたにちがいない。その一つの証左として、すでに十六世紀と十七世紀の文学については紹介されていたこともあつてか、福島静齋が「拾八紀の仏蘭西文学」(『日本人』二四、二五号、二十九年八月)を書いている。そこでは人間思想の文学、もつとも雄大な思想の文学が取り沙汰されている。十六世紀にはイタリア文学、十七世紀にはスペイン文学の影響を受けたフランス文学は十八世紀にはイギリス文学の感化を蒙っている。のみならず、イギリスからの影響をヨーロッパ全域に伝播させたのである。フランスを通じないといかなるものも文明とは云えないのだと論じ、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソーの三人の文学をとりあげている。結局、フランス革命の一要因として、十八世紀フランス文学の自由平等思想があつたことを説いているのである。

このように明治二十年代末期にはフランス文学の特質を論ずる傾向が目立ってきているが、これには、明治二十五年三月に渋谷保が『独仏文学史』を博文館から刊行して一応はフランス文学史が邦語で読めるようになっていたことと決して無縁ではないように考えら

れるのである。渡江の著書では、フランス文学史をつぎの四項に分けて論述している。

(一)、封建時代ノ文学、(二)、仏国文学ノ発達

(三)、路易十四世ノ文学、(四)、仏国最近世ノ文学。

邦語でフランス文学史が刊行されたとは云え、フランスでもまだ首尾一貫したフランス文学史の刊行が待望されていた時期でもあったことを見落してはいなかった。『帝国文学』二巻十号(二十九年十月)所載の「仏文学史編纂」という記事はプティ・ド・ジュールヴエの『起源から千九百年までのフランス語およびフランス文学史』の刊行を伝えたものであるが、内容紹介と同時に、これが近世文獻学の研究に基づく科学的方法と言語学上の成果を駆使した編纂による文学史であることを最大の讃辞で紹介している。多分、この文学史の翻訳刊行を期待しての紹介記事であつたのであろう。

ところで、この頃、わが国最初のフランス文学研究の雑誌『白百合』(明治二十九年五月)が創刊されたが、これはわずかに二号しか刊行されなかった。長田秋濤が創刊号に『椿姫』を訳出しているのが注目されよう。のちに早稲田大学出版部からこの小デューマの小説を翻訳出版しているが、『白百合』に訳載したのは同じ作者の戯曲の訳であつた。秋濤は「訳文の語句往々本邦普通言辭としては穩ならざる者多し、蓋し原文と相反せざらんと努めたるに依る」と序文で断つていのように、原文に忠実な口語体の翻訳劇として訳出している。小説『椿姫』ではヒロインは後藤露子の名になっているが、ここではマルグリット・アルマンであり、そこにも訳者の態度が表われている。

『白百合』は秋濤のほか黒田清輝、久米桂一郎たちによって刊

行された同人雑誌で、「我が国の文壇に仏国文学美術の花を移植」することを目的とした画期的な定期刊行物ではあつたけれど、短かすぎた生命のためにわが国の文学美術には注目すべき影響もあたえずに終つてしまつた。ミシユル・ルヴォン、ロシヤ公使ヒトロヴォの寄稿もみられ、本格的なフランス文学研究雑誌として出発したのであつたが、ほぼ同時期に創刊された『智徳会雑誌』にくらべるとき、内容的には乏しいものを隠せないのである。

『智徳会雑誌』の場合、当初は普通の雑誌であつたが、ある時期からフランス文学紹介のそれへ変貌をみせるのであつた。

いづれにせよ、この時期になつて、ようやく日本人によるフランス文学の研究の機運が熟してきたのである。明治二十二年に、東京帝国大学にフランス文学科が創設され、二十六年頃からフランス語によるフランス文学の講義が始められていたが、研究水準はそれほど高いものではなかつたようである。前記二つの雑誌にみられるフランス文学紹介・研究はそうした背景のもとに生まれたのである。

上田敏は『帝国文学』(三十年八月)に「仏蘭西文学の研究」を寄稿して、フランス語がわずかに法律学の分野で余命を保つていたが、最近になって高等教育において勢力を回復してきたことを述べている。すなわち、文科大学のフランス文学科が数名の学生を擁するようになったが、学界全体にはまだ影響をあたえるまでには至っていないことを指摘している。

上田敏は、この文章で「西欧大陸最大の文学は何等の感化を邦文に与ふことな」と慨嘆し、まず最初に十七世紀の文学から研究を開始すべきだと、コルネイユ、ラシーヌ、モリエール、ラ・フォンテーヌ、ミユツセ、ボードレール、ユゴー、フロベール、ゴンク

ル、ゾラ、ドーデ、バルザック、ブルジュエなど、十七世紀から十九世紀までの主要文人たちに言及したあと、日本の文学を清新雄大の国民文学たらしめるには伝統あるフランス文学を研究しなくてはならないと説いている。

この時期のわが国におけるフランス文学研究の状況を知る上では『智徳会雑誌』四三号（三十一年十二月）所載の「仏蘭西文学の研究と我智徳会雑誌」の文章は非常に貴重な資料であろう。この一文では、当時の翻訳の大家、森鷗外、森田思軒、内田不知庵の三人に触れ、思軒が英訳本からの重訳でユゴーを翻訳・紹介したことと言及し、「訳者が刻苦惨憺の甲斐もなく、間々誤れるふしあるは免れ難きなるべし」と批判し、ついでフランス文学の研究の必要性を説いているが、それはあくまでも「国民文学の振興」のためのものであった。『智徳会雑誌』がやがて誌名を『忍ぶ草』と改題（明治三十一年二月）して本格的なフランス文学研究誌と変貌することを考えば、我田引水的な主張であるが、国民文学の大成に寄与しようとする姿勢には注目してよい。だが、『忍ぶ草』もまた目的のみ大きくて効果の乏しい雑誌に終わってしまったことはきわめて残念である。

## 2

最後に、ごく簡略に、日本の近代作家のうちにフランス文学がどのように摂取・吸収されたかという問題について述べておきたい。

森田思軒、黒岩涙香などの翻訳者、宮本平九郎、人見一太郎、上田敏などの紹介者を別とすると、作家・詩人のなかにフランス文学の影響をまともにも受けた者を探すことは決して容易ではない。明治

三十年代以降であれば、永井荷風におけるゾライズム、モーパッサンの影響など、すでに数多くの研究も出されているように、それはむずかしいことではない。だが、小論が問題とする明治二十年代では多くの作家はいない。ここではそういう存在として、尾崎紅葉と森鷗外の二人を対象に、そのフランス文学とのかかわり方をみておきたい。

尾崎紅葉は出世作『二人比色懺悔』（明治二十二年）で西鶴の影響を受けたが、やがて西鶴模倣を脱却し、外国文学の翻案を試み、十二編の翻案を作っている。その翻案作品の三分の一はフランス文学に材をえている。すなわちモリエールの『守銭奴』から『夏小袖』『にわか医者』から『恋の病』、ゾラの『制作』から『むき玉子』、『テレーズ・ラカン』から『隣の女』などを翻案している。紅葉は英訳本を通じてフランス文学の作品に接したが、一方では長田秋濤との共訳で、ウィクトル・ユゴーの『ノートル・ダム・ド・パリ』を『鐘楼守』の訳題で刊行している。さらに仔細に紅葉の作品を検討すると、ゾラの感化を『恋山賊』、『浮蔵主』、『不言不語』などに見出すことができる<sup>③</sup>。『金色夜叉』にはモリエールの『守銭奴』のそれさえみられるのである。『金色夜叉』の場合、金のため男を裏切る明治の式女という点で、『夏小袖』に翻案した『守銭奴』が影を宿していることが考えられるのである<sup>④</sup>。

一方、森鷗外は、ドイツ文学にも決して無縁ではなかったことあるが、と同時に、フランス文学にも決して無縁ではなかったことも見落してはなるまい。

鷗外の歴史小説はプロスペル・メリメの作品にきわめて類似しているが、これは必ずしも影響関係によるものではなく、両者の傍観

者的態度が共通しているのだという見解が示されている。<sup>⑤</sup>

だが、鵬外がドイツ留学後、最初に翻訳した作品がアルフォンソ・ドーデの小品であったことから、フランス文学への愛着の顕著さがあることがえることだろう。彼は『緑葉の歎』、『戦慄』、『みくづ』などドーデの翻訳を試み「言帝の曲」を紹介している。ドーデについては、滞独中にゴットシャルの評論集などを通じてかなりの知識をえていたようで、帰国後に発表された『今の諸家の小説論を読みつゝの論文で、ゾラが分析と解剖の成果を小説にしていることを指摘してこれを批判したあと、「ドオドエの如きは即ち然らず、其自然を駆使するや、塵埃自ら脱落して詩美顯る」云々と述べ、ドーデを高く評価している。鵬外は、ヘンムの『文学的回想』から「ドオドエ」を『国民新聞』に発表しているが、そのドーデ理解はゴッドシャルの見解に負うていることは隠せない。すなわちゴットシャルは、ドーデの作品を「写実小説」と呼び、称讃しているが、鵬外もその上に乗ってドーデを読んだのである。鵬外のドーデ訳は、アドルフ・ゲルシュトマン訳の独訳本に依拠して行なわれていた。

鵬外は医学者であったことで、かえって実証的精神を基盤とする自然主義文学に反撥を覚え、小説即科学、または実験とするゾラには共感できかねたようであり、しかも高級官吏としての道歩んだ人であれば、その精神はきわめてプチ・ブル的で、高踏的気分の持ち主であったために、ゾラの描く下層階級の生活に漂う厭世的・頹廢的雰囲気にはとうてい入りこめないものがあつたのであろう。一見醜悪な現実を描いても、そこに痛切きわまりないヒューマニズムや理想主義的社會主義をゾラ一派が示したことには鵬外は気づかなかつたのであろう。

明治二十五年一月、「エミル・ゾラが没理想」を鵬外は「志がらみ草紙」にのせたが、「蓋しゾラは天のなせる詩人なれば、おのれは空想を遠離けて批評をなし、試験をなすとおもひつつも、神来に逢ひ、空想を没したり、ゾラは没理想論を唱へつつも大理想家の業をなしたり」と述べている。鵬外のゾラ理解は前述の「今の諸家の小説を読みつゝ」においてゴットシャルの所説を受け売りしていたときにくらべると、かなり進歩しているけれど、まだゾライズムを容認するところまでには達していない。ゾラはたとえ反撥の対象であろうとも、やはり大きな存在であつたようである。

鵬外は明治四十三年五月にはフローベルの「トロア・コント」から「聖ジュリアン」を翻訳しているように、かなり長い年月にわたってフランス文学に対する関心をもっていた作家であつた。

註1. 柳田泉『明治初期の翻訳文学研究』（春秋社）、拙稿『フランス文学移入史序説——明治十年・二十年代の翻訳』（『日本仏学史研究』三十一号）参照。

註2. 紙教の都合上、『早稲田文学』と『智徳会雑誌』に関しては、拙稿『早稲田文学』（第一次）と『フランス文学』（『比較文学』九巻）、『明治中期のフランス文学——『智徳会雑誌』の場合——』（『比較文学』三十一巻）参照のこと。

なお、当時の西洋文学紹介の雑誌論文記事は佐藤輝夫・他編『近代日本における西洋文学紹介文獻書目・雑誌篇』（悠久出版）を参照。

註3. 拙稿『尾崎紅葉とエミール・ゾラ』（『比較文学年誌』八号）参照

註4. 拙著『作品にみる東西文学の接点』（皇十大出版部）所載『金色夜叉』参照。

参照。

註5. 佐々木明夫「鵬外とメリメ」（『比較文学研究』十号）参照。

註6. 拙稿「森鵬外とドーデ」（『鵬外』十一号）参照。